



昨年 11 月から年長クラスを中心に毎週火曜日に活動。子供たちはもちろん、所長先生をはじめ職員のみなさんととても明るい印象の保育所。街中の保育所としては所庭も広く、栗林公園や峰山も近くにあり開放的な立地に見える。また、当初から積み木に注力している所で、それらの経験が子供たちに優れた造形能力と、破壊と再生の哲学を自然なかたちで身につけさせていると思えた。そんななか、昨年度の活動はスポンジを使った「お絵かき」から始まり、柔らかいアルミ線を使用する「ワイヤーアート」や、250 キロの土粘土を用いた「造形制作」、描いた絵を切って折り曲げる「ペーパークラフト」、素材体験としての「石膏あそび」など、より専門的な造形材料・手法を試みた。こどもたちは驚くほど何の躊躇いもなく、材料に触れ、知識やスキルを吸収していく。伸びやかに自らの表現として作品を産み出していった。そして今年度スタート。こちら待ちに待った新年長クラス。一年を通して成長を見守りたい。まず春から秋までの期間は準備体操。こちらからの技術指導は必要最低限。身近にある素材が見方次第で表現材料や道具に一変することに気付き、自己の内側にある眠れるセンスが開花することを目指している。フリースタイル創作と名付けた材料・道具・テーマ、全てが自由な時間を提供している。当初、子供たちに飽きさせずに活動に取り組ませることが重要な課題考えていたが、そこは取り越し苦労。自由であること、人とは違う自己表現が出来、それが許され褒められることをを彼らは喜び、驚異的な集中力と満面の笑みで応えてくれる。これまでを振り返り気付いたこと。それは子供たちの社会的な成長とそのスピード。5月、フリースタイル創作に取り組みはじめたころは、プリミティブ（原始的）な表現が多く見られた。中には抽象表現主義の巨匠マーク・ロスコのような色だけで世界を表すような作品も現れた。その色使いは潜在的に内包された彼らのセンス。しかし、回を重ねて行く度に現実世界にある具体的なものに変化していく。それは 5 歳から 6 歳の彼らには至極当たり前の成長なのだと思う。ただ、私の個人的な考えでは、ずっとこの感覚を持ち続けて欲しいと願う。また、芸術士の枠を超える活動にも取り組ませて貰っている。7月後半、一泊二日のお泊まりキャンプ。嬉しいことに引率の一員として参加。一ヶ月前から、チームに分かれての打ち合わせや、キャンプファイヤーでのスタンプの練習。そして大興奮の当日。そんなメモリアルな場面を共有できたこと、保育所と云う名の家族の一員になれた様に思える。そしてこれから。キャンプでの思い出を全員でジオラマにしようという提案。みんな大賛成。1 回目はチームに分かれて、制作パート決めと、材料・道具のリストアップ、作り方の検討会議。2 回目から実制作に取りかかる。現段階ではどれだけの時間が掛かるかは分からないが、時間を掛けてこそ出来る作品の喜び・達成感を味わって欲しいと思う。